

【書評】

文化人類学者から学ぶ経済学

大橋賢裕*

凡例

- 本稿は、「ジョセフ・ヘンリック／今西康子（訳）『文化がヒトを進化させた一人類の繁栄と〈文化—遺伝子革命〉』白揚社，2019年」の書評である。以下，本文・脚注においては「本書」という。
- 原本は，Joseph Henrich (2016) *The Secret of Our Success: How Culture is Driving Human Evolution, Domesticating Our Species, and Making us Smarter*. Princeton, NJ: Princeton University Press. ただし本文・脚注において引用するページ数や記述は，すべて邦訳からとする。
- 参照文献の引用について，本文中は作者と文献番号の形（例：メスーディ [5]）で書き，脚注は作者名を省略して番号のみ記述する（例：文献 [5]）。

1 はじめに

「経済学とはどういう学問ですか。」私は人からそう聞かれたら、「人の選択を考える学問です」と答えることにしている。どんな経済学のテーマにも，突き詰めると必ずどこかに「選択」という行為が含まれている。我々が選択をするとき，我々は，多かれ少なかれ，自身の価値判断に基づいて

* 2002年3月経済学部経済学科卒業。現在，日本大学経済学部専任講師。専門はゲーム理論，行動経済学，金融論など。本ノートに対するコメントは，ohashi.yoshihiro@nihon-u.ac.jpまでお願いします。

選択をしている。では我々の価値判断を形成しているものは何だろうか。

我々の価値判断を司るのは、文化である。これが本書から導かれる答えだ。本書は経済学の本ではない。実際、著者のヘンリックは文化人類学者であり、現在は、ハーバード大学人類進生物理学部の教授である。だが彼は、文化人類学者として、*American Economic Review* に単著論文を掲載している¹⁾。

ヘンリックは1968年生まれで、1991年にアメリカのノートルダム大学の人類学と航空宇宙工学の学士を得ている。その後、航空宇宙工学のエンジニアとして働き、1993年にUCLAの人類学部の大学院生となった。彼は当時、発展途上国の人々の意思決定や経済行動を理解したいと思っていた。とりわけ長期にわたるフィールドワークを行うという文化人類学的な研究方法に惹かれていた²⁾。修士論文作成後、彼は現在でいう行動経済学や実験経済学の関連論文を狩猟し始めた。そして「最後通牒ゲーム」の実験をペルーのマチゲンガ族相手に行った研究論文が、2000年にAERに掲載された。これまでに手がけた学術論文は100を超え、現在では文化進化の研究者として学界内外で多くの榮譽に輝いている³⁾。

本書の主張をまとめると次のようになる:『人間社会のみならず、人類そのものの進化において、文化は欠かせない。人類は文化に依存した種だ。文化が我々を賢くさせたのだ。』ヘンリックはこの主張を、様々な研究事例や歴史的な挿話を用いて裏付ける。それによって、ヒトの意思決定や行動は文化に深く依存していると、我々に強く訴える。本稿の目的は、そんな本書の魅力の一端を紹介することである。尚、本稿は書評とはいえ、経済学者に紹介するという目的のため、あえて経済学に関連する箇所絞って、私見を交えながら詳述するという体裁をとることを予め断っておきたい。

1) 文献 [1]。

2) 本書10ページ。

3) 本書原本はCanadian Institute for Advanced Research (CIFAR) の2016年のBook of the Yearに選ばれている。

2 本書の概要

本書は、文化人類学および文化進化に関する書物である。全17章からなる書き下ろしで、目次と索引を含めて全部で605ページある。内容は非専門家のための案内書といった具合だ。記述は全て学術研究の成果が元になっており、数多くの参考文献が掲載されている。興味ある事柄を自分で調べる際にも役立つであろう。

経済学者にとって文化進化という言葉は聞き慣れないかもしれない。文化進化(cultural evolution)の基盤は、生物学における集団遺伝学の数理モデルである。それを修正した理論をつかって、文化の変化や発展を研究する⁴⁾。研究対象は文化だが、どちらかといえば、地道なフィールドワークとは対極にあるといえよう。

だが本書の作者ヘンリックは、元々フィールドワークに熱を上げていた。本書でも、彼が実際に観察した民族の特異な行動様式を、文化進化論的な観点から説明している。たとえば第7章では、「なぜマプチェ族はトウモロコシ料理に薪ストーブの灰を加えるのか」というテーマを取り上げ、一見料理を台無しにするように思える行為の背後に、隠された秘密があることを我々に教えてくれる⁵⁾。他にも、キャッサバ(タピオカの原料となる芋)の不自然なまでに時間がかかる下処理作業や、ヤサワ諸島の妊婦がウツボを食べない理由といった、読者の興味をそそる記述が至る処に現れる。

本書がこうした文化人類学的な事例を取り上げるとき、その背後には「文化は偉大だ」というメッセージと、西洋的な合理主義観に対する懐疑が込められている。特に本書の第1章から第3章は、ヒトという種がいかにも

4) 理論的手法や結果については、たとえば[9]およびその参考文献を参照されたい。また[5]は、文化進化を進化論と対比させて紹介する、本書よりもやや専門的な本である。

5) 本書第7章156ページ。マプチェ族の人々もなぜそうするか理由は知らない。ただそうしろと教えられてきたからそうしている。実はこの例、ヒトのもつ「見たまんまをまねる」という能力が、結果的に生き延びる上で役にたったことを示しているのである。本稿脚注17)も参照。

ろいかを我々に伝えようとしているようだ。たとえば「コスタリカのオマキザル50匹とヒト50人とで中央アフリカ奥地の熱帯雨林でサイバイバルゲームをしたら、勝つのはどちらだろう」といった寓話を用いて、我々人類の非力さをわかりやすく伝えている⁶⁾。他にも、「マッチングペニー」ゲームでチンパンジーに惨敗するヒトの事例を紹介したり⁷⁾、西洋文明の粋を結集したイギリス海軍探検隊105名が2年足らずで全滅した北極圏の島で、何世代にもわたって悠々と暮らし続けるイヌイットの事例⁸⁾を紹介したりしている。

本書は、示唆に富んだ多くの事例と学術的な研究成果とを織り交ぜながら、文化が持つ偉大な力を我々に具体的に伝えようとする。ヘンリックは言う。今日の我々があるのは、過去からの文化の蓄積のおかげであり、そのおかげで我々は賢くなったのだと⁹⁾。さらに、文化を継承するのに適した種に対して、自然選択が有利に働いたのだとも言う¹⁰⁾。ここに文化-遺伝子共進化 (culture-gene coevolution) の発想が現れている。

2.1 文化とは何だ

文化とはそもそもいったい何を指しているのか。辞書には、「(1) ある民族・地域・社会などでつくり出され、その社会の人々に共有・習得されながら受け継がれてきた固有の行動様式・生活様式の総体。(2) 人間がその精神的な働きによって生み出した、思想・宗教・科学・芸術などの成果の総体。」といった説明がなされている¹¹⁾。だが本書は、文化の明確な定義を

6) 本書第1章20ページ。ヒトに携帯が許されるのは衣服のみ。めがねはダメだ。

7) 本書第2章41ページ。ヒトは混合戦略ナッシュ均衡を見つけるのがチンパンジーよりも不得手なようだ。

8) 本書第3章47ページ。その土地で暮らすための知恵がなければどんな高級設備も役に立たないという例。その知恵の獲得こそ文化の力だ。

9) 本書27ページ他。

10) 本書23ページ、65ページ、95ページ他。本書第5,6章では、文化進化がヒトの身体形成に影響を与えた事実が述べられている。

11) 文献 [7]。

与えていない。私はこれは本書の欠点であると思う。

とはいえ、文化（culture）の定義は研究者の世界でも多種多様であるようだ。たとえばメスーディ [5] は、「文化とは、模倣、教育、言語といった社会的な伝達機構を介して他者から習得する情報である」と定義している。そして「ここでの『情報』とは、『知識、信条、傾向、規範、嗜好、技術』を含む広義の情報であり、社会的に習得され、集団内で共有される」と説明している¹²⁾。要するに文化とは情報であり、個体が他の個体から学ぶことで情報が伝わっていく過程を重要視する。この点は、個体の持つ情報が親から子に遺伝として伝わるという集団遺伝学の見方とは本質的に異なっている。

本書では、文化の明確な定義が出てこない代わりに、「文化的学習」という言葉で、文化進化の特性を読者に伝えようとしている。文化的学習（cultural learning）とは、模倣や推量によって積極的に情報を得ようとするヒトの高次の学習を指す。こうした学習を行う集団が獲得した情報が、何世代にもわたって連綿と受け継がれてきたことで、ヒトは賢くなった。そしてこれを文化進化と呼んでいる¹³⁾。

3 経済学の観点から読む

我々経済学者にとって、本書の価値は、ヒトの特性に関する様々な科学的発見を伝える点にある。私見では、4章、8章、そして11章が、経済学者にとって有用であると思う¹⁴⁾。そこでこれら各章ごとに中身を紹介しよ

12) 文献 [5] の13-14ページ。だがこの定義も元をたどれば、Tylor が1871年に提示した「社会の成員としての人間（man）が身につけた知識、信念、芸術、法律、道徳、風習、その他さまざまな能力や習慣を含む複雑な総体」という定義に倣っていることが、[5] の13ページ脚注1にて明らかにされている。

13) 第1章27ページの記述などを参照。

14) 他にも興味深い章はいくつもある。たとえば過剰模倣（overimitation, 7章）や集団脳（collective brain, 12章）は興味を掻き立てられるテーマであるが、本稿では分量の関係で省略した。

う。

3.1 第4章：バイアス

本章ははじめに文化－遺伝子共進化の概念を伝える。押さえておきたい重要な点は、他者から学びとろうとする能力を脳内に形成する遺伝子に対して、自然選択が有利に働いたという発想である。文化的学習に適した種が長期にわたって存続した結果、今日の我々の生活があるという解釈をする。遺伝子による進化と文化とは独立でないという仮説で、これを裏付ける研究結果を紹介することは、本書の目的の一つにもなっている。

だが、残念ながらというべきか、この文化的学習におけるヒトの心理的な性質は、伝統的経済学が想定するような「正確な」学習を可能にはしなかった。どうやら我々ヒトという種は、生まれながらにしてバイアス(bias)のかかった学習をするよう運命づけられているらしい。ここでの学習は、習慣、信念、概念、選好などを、他者から効率的に学ぶことを指す。これらを見よう見まねで学ぶときには、いちいち論理的な理由をつけて習得しようとするよりも、とりあえず見たまんまを真似してしまおうというやり方のほうが効率的というわけだ。その最もわかりやすい例は、幼児期の言語の習得だろう¹⁵⁾。

こうした記述は、カーネマン [10] によって広く知れ渡った「システム1」と「システム2」を我々に思い起こさせる。我々の認知システムにおいて、自動的かつ優先的に働くのは、直感的処理を得意とするシステム1であり、バイアスのかかった判断をしてしまう要因もまたシステム1にある。本章の内容を踏まえると、システム1の反応は文化－遺伝子共進化の賜物であり、ヒトという種はそれに抗うことができないと言わざるを得ない。本章でもいくつかのバイアスが紹介されており、中でも、ヒトは成功者をまねる傾向を持つという成功バイアスは注目に値する。成功バイアス

15) 言語の獲得は文化進化の産物であることが、本書第13章に書かれている。

は、証券投資に関する実験においても観察される。MBA の学生にポートフォリオを構成して収益額を競わせる実験を行ったとき、CAPM に基づく最適ポートフォリオが計算できるにもかかわらず、学生達は各回の収益額でトップだった者のポートフォリオ構成をまねようとする¹⁶⁾。だが、最適戦略がわからないときには、よさそうに見えるものを意識的にまねることが合理的である場合もある¹⁷⁾。

3.2 第8章：プレステージ

本章では、文化的学習におけるプレステージ (prestige, 名声・信望) の役割についての研究が紹介されている。文化の力とは、ヒトの持つ文化的学習能力のことであり、それは頭を使って他人から積極的に学びとることである。では誰から学ぶのがよいのだろうか？プレステージの高い人から学ぶのがよい。つまり、その人が属している集団やコミュニティのなかで一目置かれている人を見つけ、その人の行動をまねるのが効率的な文化的学習というわけだ。

ヒトはプレステージの高い人を見つけ、その人から「技」を学ぼうとすると、何とその技の習得に結びつくかわからないため、何でも真似しようとしてしまう(過剰模倣)¹⁸⁾。その真似は意識的に行うものもあるが、それとは別に、無意識のうちに行われる真似もあるという。たとえば話し方やしぐさがいつの間にか似てしまうというものだ¹⁹⁾。

16) 文献 [2]。

17) 本書72ページ。我々のこうした文化的学習能力は、バイアスをもつがゆえに、時に過剰になることもある。それが悪い形で顕現したものが、後追いのような模倣自殺であるという(本書84ページ)。他方、本書第7章では、因果関係がわからないうちはとにかく見たまんまを忠実に模倣する種が生存競争に勝ったという主張を展開している。

18) 本書183ページ。私が本や論文を読むときに色鉛筆を使うのは、学部時代、ゼミでの輪読中に鈴木豊先生が色鉛筆を使っているのを目にしたからかもしれない。

19) 本書190ページ。大学院時代、友人に私のしゃべり方がM先生(大学院時代の指導教員)と似ていると言われたことがある。当時は少しショックだったが、今では「私は文化的学習に秀でた個体なのだ」と思うようにしている。

本章が経済学者にとって示唆に富むのは、人に何かをさせたいとき、集団の中の Prestige の高い人に注目せよ、という啓示を与えてくれる点にある。たとえば、参加者から忌憚のない意見を聞きたい場合、Prestige の高い人から発言するのはダメだ。本書では、サンヘドリンにおける死刑の審議において、一番下っ端の裁判官から順に意見を言わせたという逸話が紹介されている²⁰⁾。これは Prestige を考慮した賢いルールだ。

Prestige の高い人は、他の人々にとってモデルになるので、その人に利他的な行動を取らせると、多くの人はその行動に追随しようとする。たとえば慈善団体が寄付を募るとき、有名人からの寄付を初めに募るのは、うまい方法といえそうだ²¹⁾。本書では、Prestige の高い人が寄附をすれば低い人も追随し、Prestige の低い人が寄附をしなかったら高い人もまた寄附をしなかった、という実験室実験の結果を紹介している²²⁾。

Prestige が教えてくれるのは、集団内における相対的な力関係の重要さだ。これは政治や労働組合の運営といった話題を論じる際に必ず絡んでくる。また Prestige の利用は、多くの人々に特定の行動を促す際の **ナッジ** (Nudge) にも使える発想だ。Prestige を取り込んだモデルを作るという研究の可能性も考えられよう。

3.3 第11章：社会規範

本章は社会規範を扱う。学術的観点からは、私は本章が経済学者にとって最もなじみやすいと思う。その理由の一つが、経済実験を数多く紹介していることだ。

最後通牒ゲーム (ultimatum game) というよく知られた経済実験がある。

20) 本書210ページ。サンヘドリン (the Great Sanhedrin) とは、古代ユダヤの法廷で、裁判官は70人いる！

21) 本書197ページ。

22) 文献 [3]。

これは2人1組になって、決められた金額を分け合うという実験だ。このとき1人が分配案の「提案者」となる。もう1人は、提案を受入れるか否かを答える「応答者」だ。応答者が受入れた場合は提案されたとおりの分配が実行されるが、拒否した場合は互いに何も受け取れないというルールになっている。この実験におけるゲーム理論的な最適解は、提案者にとっては最小単位数（たとえば1円）を相手に提示することで、応答者にとってはゼロ以上であれば何でも受入れるというものになる²³⁾。

しかし実験では、たいていの提案者は相手にもっと多くの額を提示する²⁴⁾。考えられる仮説はいくつかあるが、ここでは提案者も応答者ともに「平等に分配すべき」という社会規範を持っているという仮説を取り上げたい²⁵⁾。これを調べるために使われるのが、**独裁者ゲーム** (dictator game) という経済実験で、これは最後通牒ゲームにおいて応答者から拒否権を取り去り、「ただ受入れるだけ」にした単純極まるゲームである。

本書287ページでは、西欧社会の25歳以上の成人の場合には、最後通牒ゲームでも独裁者ゲームでも、提案者の相手に対する提示額は、半額が最頻値となることを伝えている。しかし学生同士で独裁者ゲームを行うと、提示額はもっと低くなるという（同ページの脚注11、本書567ページ）。これらの結果から、本書は、西欧人はある程度成熟してくると、「平等に分配すべき」という社会規範が根付いてくるという結論を導いている。

私は、勤務校の日本大学経済学部の授業内で毎学期、最後通牒ゲームと独裁者ゲームを1回ずつ行っている。2020年の授業を見ると、前期後期ともに、最後通牒ゲームでは半額を提示する提案者が最も多かった。独裁者ゲームでは、前期（有効回答数121）だと0円が37.2%で、半額が34.7%で

23) この戦略の組は部分ゲーム完全均衡になる。ゲーム理論と実験についてはたとえば文献 [6] の第12章を参照されたい。

24) 文献 [4] は、多くの研究論文を調べた結果、提案者が相手に提示する金額の平均は総額の約40%であると報告している。

25) 経済実験では、**互酬性** (reciprocity) の仮説がよく取り上げられる。文献 [6] 第12章を参照。

あったが、後期（有効回答数30）は0円が20.0%で、半額が53.3%であった。どちらも半額提示の割合が大きい点に注目されたい。受講生は1年生から4年生までいる。学年が上がるにつれ人数が減るため、平均年齢は25歳未満であろう。だがそれにもかかわらず、本書が示す「25歳以上の成人」と同様の結果を得ている。この違いは、西欧と日本の文化の差と言ってよいだろうか。それとも単なるアーティファクトなのか。本格的な研究に着手するのも面白そうだ。

本章には他にも、戦争を体験した人々が公共財ゲームでどうふるまうかを調べた実験や、規範逸脱者を罰すると脳内の報酬系が活性化するという事実など、行動経済学や実験経済学に関心のある経済学者にとって一読する価値のある話題が並んでいる。因みに Henrich [1] は、「平等分配」が規範にならない社会があることを、ペルーのマチゲンガ族に対する最後通牒ゲーム実験によって伝えている。

4 おわりに

本書は、文化－遺伝子共進化の視点から、ヒトの特性を論じた書物である。本書から得られる知見を経済学の研究に取り入れる価値は十分にある。本書が影響を与えるであろう研究領域は、思いつくだけでも、行動経済学、実験経済学、開発経済学、労働経済学、ゲーム理論、学習と群衆行動の理論などがある。ともすれば狭い専門領域の中に閉じこもりがちな経済学とは対照的に、本書は、経済学の研究のあり方がどう変わるかにまで言及している²⁶⁾。もちろん我々経済学者は、これまで得られた研究蓄積を大事にすべきだが、研究対象となる人間の選択を考察する上で、心理や規範といった文化的側面をもう少し慎重に扱ってもよいのではないだろうか。たとえば研究成果を実用する際、人の持つ合理性のみを念頭に置き、事実を伝

26) 本書第17章482ページ。こうした姿勢は文献 [5] にも見られる。

えればわかるはずと盲信するのは危険だ。想定する人間像を誤ることになり、結果的に大きな誤算となってしまいうだろう²⁷⁾。同様に、経済政策の実施に関する議論を行う上では、文化の話題はもはや避けては通れない²⁸⁾。

本書は文化進化に関して多岐にわたるテーマを取り上げた大著である。そのためか、やや散漫な印象も与える。また、同じテーマに関する記述が章をまたいで登場することもあり、あとで参照する際には不便である²⁹⁾。

訳語への注文を一つつけたい。本書は原文にある *sibling* の訳語を「きょうだい」と書いている。普通「兄弟」と書く。兄弟は性別によらず使えるからだ。間違った規範を広めてほしくない。

文化進化は、長い歴史の過程を経て今そうなっているという事象を説明するには向いているが、残念ながらこの歴史の過程は、我々の寿命を簡単に越えてしまう。人類が人工的に作り上げた制度について、その存続性を考えるとき、果たしてどこまで続くのかという疑念がわいてくる。たとえば今の法制度や学校教育制度の歴史など、高々数百年の話ではないか。今の人間にとって合理的な制度が、未来永劫にわたって使われるとは限らない。しかしヒトの持つ生得的な心理と適合した制度なら話は別かもしれない。仮想的な制度をモデル上で比較することは、経済学が得意とするところだ。ヒトが作り上げた制度の存続条件を明らかにして、経済学から文化人類学への「お返し」ができる日がいつか来ることを望みたい。

27) 想定する人間像を誤った例として、2020年新型コロナ対策の一環として実施された特別定額給付金申請用紙の、総務省が作った見本がある。あの見本通りに作った自治体では、申請のミスが多発した。たとえば [11] 参照。

28) 本書14ページには、世界銀行の報告書『世界開発報告2015』に、開発政策を行う上で文化は経済行動に影響するという主旨の記述があることを伝えている。

29) たとえば本稿で取り上げたプレスティージは第8章がメインだが、第4章にも同じ節がある。

〈参照文献〉

- [1] Henrich, J. (2000). “Does culture matter in economic behavior: Ultimatum game bargaining among the Machiguenga.” *American Economic Review* 90 (4): 973–980.
- [2] Kroll, Y., and H. Levy. (1992). “Further tests of the Separation Theorem and the Capital Asset Pricing Model.” *American Economics Review* 82 (3): 554–670.
- [3] Kumru, C.S., and L. Vesterlund. (2010). “The effect of status on charitable giving.” *Journal of Public Economic Theory* 12 (4): 709–735.
- [4] Oosterbeek, H., R. Sloof, and G. van de Kuilen. (2004). “Cultural differences in ultimatum game experiments: Evidence from a meta-analysis.” *Experimental Economics* 7 (2): 171–188.
- [5] アレックス・メスーディ／野方香方子（訳）『文化進化論：ダーウィン進化論は文化を説明できるか』NTT出版，2016年
- [6] 岡田章『ゲーム理論・入門（新版）』有斐閣，2014年
- [7] 北原保雄（編）『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店，2010年
- [8] 鈴木宏昭『認知バイアス：心に潜むふしぎな働き』講談社，2020年
- [9] 田村光平『文化進化の数理』森北出版，2020年
- [10] ダニエル・カーネマン／村井章子（訳）『ファスト&スロー（上下）』早川書房，2014年
- [11] 東京新聞（<https://www.tokyo-np.co.jp/article/16713>）最終閲覧日2020年12月27日